

芦屋弁慶

別名
四国落

シテ 武藏坊弁慶

ツレ 尉

子 義経

ワキ 芦屋三郎光重

ワキツレ 徒兵

狂言 舟子

所 摂津芦屋の里

立衆一声 「漕出る舟の行衛や白波の。立居苦敷。浮身哉。

シテ 「是は西塔の武蔵坊弁慶にて候。

サシ 「扱も我君判官殿。科なき御身の情なくも。

立衆 「落人とならせ給ひつゝ。大物の浦よりお船に召。

四国に渡り。伊予の河野を御頼み有べきとて。八島の浦迄船出せしに。悪風烈敷吹落て。御船あやうかりけるに。諸天の加護や有つらん。辛き命を扶りて。風静まれば夫よりも。曉方に艤を立てく。漕行末の跡の波。足下共知らぬ海の上。焉く成覧夜深きに。遠島守の漁火の。ほの幽かにぞ見えにける。是を便りに舟子共。とある岸にぞ漕よする。く。

シテ詞

「いかに申上候。難風を御凌ぎ有て。御着岸目出度御事にて候。又漁火のかげにて見候へば。老翁一人來り候。此者に所を尋申さふするにて候。シカぐ

尉、サシ 「すは遠寺の鐘の声。此磯近く聞え候。まだ夜深き

と。白浪の上にあや敷舟の見ゆる。あな怖ろしや。
いざ帰らばやと思ひ候。

シテ詞
「いかに尉殿。此浦は焉くの程にて候ぞ。御教へ候
へ。

尉
「是は此所にて候。見馴申さぬ御事成が。此所を御
尋候ぞや。此浦は。漁火の藻塩の煙風に消て。吹
明したる荻の一村。

シテ
「是は不思議の答やな。其様賤き老翁の。一首の歌

を返答とす。覚束なしやいかならん。

義經
「辞々是は謂あらん。げに／＼思ひ出したり。詠ず
る和歌の其中に。荻の一村と申社。荻に様々異名
あり。

尉
「実能心得給ふ物かな。其浜荻は所がらにて。葭と
も申蘆ともいふ。

シテ詞
「一村と読し心社。村と云は里の事。人里といふ事
成べし。

尉

「もしほの煙風に消てと。詠ぜし心は何とく。

義経
「夫は唯この海辺に。

詞

「ことよせたらん歌の風情か。

尉

「扱漁火の心はいかに。

シテ

「実々いざりといふ事も。是も海辺の風情かや。

尉

「否々是はさは非じ。古き歌にも漁火とは。

シテ

「難波入江に。

尉

「寄せられたり。

同

「扱は津の国蘆の屋の。く。浦にやふねをよせつ
らん。難波の事も今ぞ知る。扱尉殿は此浦の人か
さもあらば。行方尋申さん。

尉

「我はなど住家なしとやいふだすき。神の宮居は爰
とても。猶住吉の浦の波。

同

「帰る姿は遠近の。立木も知らぬ此尉が。
尉「老の浪間の明方に。

同

「岸根の小舟。

尉

「指寄せと。」

同 「我は人間に非ずとよ。明神爰に來りつゝ。源氏を
加護し申なり。濁らねばこそ神守る。我も其名は
住吉と。かき消やうに失にけり。」

シテ 「誠に有難き御告哉。先此所に御逗留有て。其後お
船を出し申さふずるにて候。」

義経 「尤にて候。」

シカゞ

トモ 「いかに申上候。此所の国司芦屋の三郎。君を討奉

らんとて。大軍を以てよせ來ると申候。」

シテ 「言語道断の次第にて。去ながら何程の事の候べき。」

さりながら御弓断有間敷候。其時弁慶陸を見れば。軍兵数多鉢さきを揃へ。よせ来る。こはそも
いか成ものやらん。」

ワキ 「抑是は当国の住人。芦屋の三郎光重也。扱も義経
落人と成給ひ。此所に來り給ふ社幸なれ。いそぎ
討取て鎌倉殿へ参らせんと。三百余騎を引率し。」

時の声をぞ揚にける。

同
「其の時弁慶得たりやと。く。船より陸に飛上りて。長刀頓て取直し。弓手や馬手に切払ふ。さしものよせてもたちまちに。十七八騎切ふせられ。其外手負太刀を捨。半町計逃去て。重て近づく勢もなし。

同
「其時光重是を見て。く。いで物見せん手なみのほどゝ。太刀抜持て進けり。弁慶長刀追取のべて。

互に龍虎の威を諍ひて。秘術を尽し。たゝかひしが。元来弁慶剛の者。さそくはきいつ。長刀とりのべ。畳み重て透間あらせす切払へば。さしもの光重きりたてられて。たゞよふ所を長刀とりのべ。車切に。かしこへ切ふせ。悦び勇みく。勝闘作つて帰りけり。

『宴曲十七帖 謠曲末百番』 国書刊行会 編